

2013年度 高浜市「防災ネットきずこう会」支援事業 講演会①「その時、地域はどう動いたか」記録

日時：2013年6月29日（土）15：00～17：00

場所：高浜市役所4階 会議室

●市長挨拶

本年度も地域防災力の向上に力を入れていく。実際の現場の状況をお聞きしたいという声もあり、今回は陸前高田市消防団の大和田氏をお招きした。経験なくしては課題も見えにくい。しかし、経験＝被災という現実であり、経験することは難しい。実際の被災現場での消防団としての活動と共に、地域の住民としての活動もお聞きできればと思う。本年度の事業も含め、今からの時間が今後の災害に備えるためのより良い時間になればと思う。

●講演会①「その時、地域はどう動いたか」

講師：岩手県陸前高田市消防団米崎分団副分団長
大和田祐一氏

愛知県の皆さまには陸前高田市への多大な支援をいただき、御礼申し上げます。まずは、陸前高田市の発災当時と、二ヶ月後の写真をご覧ください。私が住んでいた米崎町も含め、市役所など海岸沿いの建物が津波で被害を受けた。震災前の陸前高田市の人口は、24,000人であった。震災で1764人が亡くなった。内217人が今でも行方不明であり、208名が死亡届を出されている。未だ9名の方が、私の身内は死んでいないという気持ちで過ごしている。消防団員としては、熟知たる思いである。陸前高田市の消防団員は、749人中51人が亡くなった。多くの団員は、一般市民の救助をする過程で津波にのまれてしまった。その時団員は、団員としていたのか、一般市民としていたのか、突然の有事の際にはその境目が曖昧だった。半纏や作業着を着て救助活動していれば、団員としての活動と見なされ弔慰金が支払われたが、仕事に被災し、消防団員たる証を何も身に着けず救助

活動していた場合、団員としての活動と見なされない現実があった。

陸前高田市では、平成22年3月にチリ地震津波を経験している。その際、一昼夜掛け津波が迫ってきていたが、浜の人たちは逃げることなく、波が来るのを堤防で見物していた。近づいてはいけなと声をかけるも、なかなか避難しなかった。今回の津波も同じような意識で待っていたのではないかと思う。今回の揺れは、大きい揺れが3回ほど続いた。1回終わるとまた次が揺れて、長時間揺れていた。揺れが治まるとすぐに仕事場から自家用車で、屯所へ向かった。水門は他の団員が閉めており、住民の避難誘導を開始した。開始するまで20分かかった。陸前高田市では、地震発生から津波襲来まで30分以上の猶予があった。すぐに来ないとわかると安心するのか、船を繫留しにくる漁師や物見遊山の住民も堤防にいた。そういう人たちへ、高台へ逃げると声を荒げながら撮影した映像を今からご覧いただく。消防団員として、堤防間際に津波が来るのを撮影していたことは、やってはいけない行為だったと自省している。この映像は、津波がどういうものであるかと同時に、反面教師として捉えていただけると幸いである。撮影している時間があるなら、一人でも多くの住民を高台へ避難させるのが、消防団員の仕事だと思っている。（映像を拝聴）。

ご覧いただいた映像が津波の第一波である。陸前高田市には、湾口の防波堤がなかった。5mの堤防が張り巡らされているだけだったため、波が弱まることなく、津波は堤防を軽々と越えてきた。土煙を上げながら、家が家を押しつぶすように迫ってきた。比較的新しい家は、二階部分が残るなどしたが、古い家は跡形もなく壊れていった。津波にのまれても泳いで逃げれば大丈夫だと思うかもしれないが、ガレキが行き交う水の中は泳げる

状態ではない。映画やドラマであるような、水に飛び込んで救助するという感じでは一切なかった。波が引くと、逃げ遅れた人や二階部分で無事だった人など、とにかく助けなければならぬと思い、目の届く範囲の人を救助していった。そして、団員家族の安否確認も行わなければいけなかった。部隊長として、家族の安否確認を優先させるのか非常に悩ましかったが、申し訳ないが目の前で助けを求める人、目の前で泣いている人のためにできることをしてくれと、隊の団員に頭を下げ、救助活動を行った。救助活動の最中、一人の少女がガレキの上に取り残されていた。引き波が始まりそうだったため、ありったけの消防用ホースを若い団員に持ってくるよう指示し、そのホースを腰に巻きつけ女の子を救助しようとした。幸い大きな角材が浮いており、角材を伝い女の子へ近づいていった。残り 2m のところで先に進めず、水量も少なかったため、意を決し水の中へ足を踏み入れた。近くに流れ着いていたライフジャケットを女の子に着せ、抱きかかえようとしたが、地面が畑であり足をとられた。何度も足を引き上げようとしたが、上手くいかなかった。火事場のバカ力というものが出るもので、女の子を抱え救い出すことができた。女の子を若い団員に預けていると、助けを求める別の声が聞こえた。自宅の二階部分に避難していたおばあちゃんが助けを求めており、若い団員を誘導し救助へ向かった。おばあちゃんを背中に抱え避難させたが、その時のおばあちゃんの力は強く、安全な場所まで避難しても、ギュッと掴んで離さなかった。その反面、自分の住む地域で救えなかった命もある。地震以前に有事の際はあそこに避難すれば大丈夫だと、場所を指定し避難するよう話していた。しかし今回、その場所が津波にのまれた。自分自身が指定した避難先で、亡くなった知り合いもいる。その時目の届く範囲の人しか救うことができない、それが救える範囲の限界であった。

できる範囲での救助活動も落ち着き、波が治ま

りはじめたため高台から下へ降りていくと、ガレキが山積みになり壊滅的な姿がそこにあった。おそらく水門や堤防にご遺体が流れ着いているだろうとは思っていたが、日が暮れ、雪も降り始めたため、申し訳ないが生きている人を優先したいと避難先になっている中学校へ向かった。中学校では、男子生徒に裏山に行き薪を集めるよう指示し、女子生徒には様々な容器を集め、水の確保を指示した。怪我をしていない人には、水に浸かっている家々を回り、茶碗一杯の米と毛布一枚もらってくるようお願いした。当日は、寒さが予想以上に厳しく、雪が降るとは思っていなかった。中学校も卒業式を迎えるだけであり、教室の暖房も灯油が少ししか入っていない状態だったため、中学生が集めてきた薪を使い、校庭で焚火をして暖をとった。そして、集めたお米を炊き、おにぎりを避難住民へ配布することもできた。その一方で、道路も封鎖され孤立している住民がいることはわかっていた。日が暮れる中、なんとかおにぎりを届けたいと思っていたが、中学校へ避難している住民から、何があるかわからない、あんたたちだけが頼りだからと懇願され断念した。その夜は、目を瞑る人はいるものの、だれひとり寝ている人はいなかった。とにかく寒く、みんなでくっついていしかなかった。ビニール袋を探し、それぞれが片方の足や手を入れ、お互いの体温で温めあった。また、衣服が濡れたままの人もいて、冷たい風が体温を奪っていった。せっかく生き残った命をここで亡くしてはいけないという思いだった。

翌日（12日）午前、孤立している住宅を回り、水とおにぎりを届けた。中には動けない高齢者もあり、中学校や安全な場所へ避難させようとしたが、消防団員だけでは人手が足りなかった。後で必ず来るからと約束し、地元住民に協力を呼びかけ、午後から簡易担架などを作り搬送を行った。同時に手足が冷たくなっていないかなど、健康状態にも気遣った。浸水地域には入るなど、団本部からの指示があった。入るなどと言っても、現場は

専行してしまう。行くなと言われても目の前に助けるべき人がいるのだから、物資を届けなくちゃならない。その思いで私も指示を聞かず動いた。本来なら、団長や分団長の指示を無視することはご法度である。しかし、有事の際の現場は刻々と変わっていくため、その都度どう責任をとり判断していけるのかが、役職に関わらず、消防団員には求められるのではないかと思う。

震災から2日が過ぎ（13日）、団本部と会議が開かれた。米崎分団は1部、2部、3部で構成されており、3部の屯所だけが流出せずに残っていた。米崎分団では、火事があった際はその地域に一番近い屯所に本部が置かれ指揮をとっていた。しかし、津波の際だけは、一番高台にある3部の屯所に本部を設置するよう米崎分団設立当初より決められており、先人の知恵なのだと感謝した。その一方で、壊滅した町の中心部には、市民体育館、市民会館、市役所があった。以前より浸水区域だとされていたが、避難所に指定されていた。1700名近くが亡くなった原因は、一時避難場所と避難所が同一になっていたことが原因なのではないかと思う。一時避難場所は、高台や高い建物であればどこでもよく、波が引いてから避難所へ移動すればよい。チリ地震津波の際も市民体育館に避難していいのか、行政職員の中にも疑問を持った人がいたと聞いたことがある。上司に掛け合ったが、予算も時間もないと一蹴されたとも聞いている。行政は何をしていたのか、ひいてはそこに避難すればいいと言っていた消防団も何をしていたのかという話になる。今回の災害で一番責任が重いのは、行政と消防団ではないかと思う。私がここに避難すれば大丈夫だと教えたことにより、何名か亡くなっていることも事実である。災害時は、最悪の場合を想定し動かなければならないと思う。私自身の教訓として深く焼き付いている。2日目から、避難所の構築も課題として出てきた。分団内で相談し、2部、3部は状況と安否確認、1部は避難所構築する方向で決まった。一部所属の私は、

知合いの建設業者の倉庫に行き、大きい発電機とポリタンク、暖房器具をお借りした。また、学校の先生と相談し、救護室や赤ちゃん専用の部屋、女性が身体を拭ける場など、教室を活用していった。また、近くに保育園があり、プロパンガスや給食を作るための大きい釜など煮炊きできる器材が無傷で残っていた。雨風がしのげ、燃料や煮炊きの確保ができ、とりあえずは大丈夫だろうと安心した。避難所の構築をなぜ消防団がやるのかと言われたこともあるが、過去に災害が起きた時は必ず消防団があてにされてきた。あれも頼む、これも頼むと日頃から住民の声を聞く立場でもあった。避難所では、住民に対し3日間は我慢してほしい、情報はどんどん出るから3日あれば支援も届くからと声をかけ勇気づけた。実際の避難所の様子をご覧いただく。（映像を拝聴）。このようにテレビ取材も入ってくるようになった。携帯電話も何もかも通信手段が使えない中、避難所の映像をテレビで流すことにより、遠くにいる人への生きているという連絡手段にもなると考えて取材を受けた。避難所の構築もひと段落し、1部も搜索活動に移っていった。

3日目（14日）から、本格的に搜索と道路の開削作業を行った。道路の開削作業は、何よりも優先させなければならなかった。道路もガレキで寸断され、物資などを運搬する方法がなかったからである。中には、ここにご遺体があるかもしれないと思われる場所であっても、ご遺体の回収よりガレキを取除くことを優先させた。現実として、動かしたガレキの中にご遺体があったことも何度かあった。他には、遺体の運搬を行った。消防隊員は、遺体を発見すると立札を立て、消防団員に遺体を運ぶよう指示を出した。遺体の運搬などしたこともなく、運搬もしてほしいと相談するが、遺体の発見が先だからと断られた。やるしかないと思い、傷つけてはいけないと丁寧にやろうとするが、日にちが経っており水死体のため皮膚がずり剥けていたりと言葉では表せられない状況だっ

た。中には、目や口がどこにあったかもわからないご遺体もあった。匂いもきつく、脳にこびりつくような匂いであった。顔に出すことも出来ず、戻しそうになるのを堪えながら、毛布などに包み遺体安置所へ運んで行った。当初は、検視官も発見時どこを向き、どのような状態だったかを事細かに尋ねてきたが、1日30体近くのご遺体が運ばれてくるため、把握しきれなくなっていた。そして、警察も手が回らず無法地帯にもなっていた。家々を回っての盗難や置引き、ガソリン泥棒や強姦なども発生した。警察も頼りに出来ず、自らで自警をするしかなかった。日にちが経つに連れ、ボールなどを持った人が町中をウロウロし始めた。明らかに家に押し入り、金庫を壊し金目のものを持っていこうという姿が見て取れた。見過ごすことができず、職質しボールを取上げたこともあった。また、ガレキを片付けようと火を付ける人もおり、十分な消火栓が確保できないため消火できず、火の手が広がっていくため、火を付けないよう見回りも行った。とにかく備品がない状況が続いていた。消火活動するにも、ホースに穴が開き使用できない。長靴も法被も自前のものしかなく、替えがなかった。補充するよう掛け合うも、数が揃わないので出せないとの回答だった。正直憤りを感じ、胸座を掴んだこともあった。備品がない中でも活動を続けられたのは、県外の同じ消防団員がボランティアで現地入りし、長靴や法被、食料などを提供してくれたからである。その1つの長靴がどれほど有難かったかは計り知れない。ただ、消防団だけが頂戴することはできないため、避難所に一度持っていき、消防団で使用してもいいか確認することだけは忘れなかった。

最後に、東北では「津波でんでんこ」の教えがある。てんでばらばらに逃げろという教えだが、命を守る職務の人間が、目の前の人をほっておいて逃げられるかという、そうではない。消防団でも20分経ったら逃げろというルールができたが、目の前に助けを求める人がいるのに逃げるこ

とはできない。とは言うものの、父親という立場もあり、勇ましいだけが消防団ではないのも事実である。とにかく、自分の命を自分で守ることが肝心であり、逃げない人を逃がすために、消防団員が命を落としてしまう危険性があることを、住民には認識してほしい。また、消防団も住民と話ができるよう、日頃から積極的に地域と関係性を深めていかなければならない。災害時にあてにされるのは、警察でも消防でもなく、消防団員である。頼られる存在であることを自覚し、より一層邁進していただきたい。

<聴講者からの質疑応答>

Q：消防団に入り15年になる。陸前高田市では、どのような訓練をしているのか？

A：水防訓練など高浜市と同様である。ただ、職責にある人間の多くは、地域の代表や顔役をやっている人が多い。地域と顔がつながっていることが、頼られる存在に成り得るのだと思う。

Q：映像の当初は笑い声も聞こえていたが、本当に危ないと思ったのはいつ頃か？

A：チリ地震津波は90cmの波だった。堤防を越えることはなかったため、同じくらいだろうと思っていた。しかし今回は、堤防を越えてきた。これはダメだと思った。あとは夢中で走った。本当に怖かったのは、高台にあがった後だった。自然の脅威を目の前にすると人は動けない。

Q：津波の前の揺れはどうだったか？

A：だんだんと叩かれるような揺れだった。1分以上揺れていたように思う。治まったと思うとまた揺れてを何度も繰り返していた。揺れによる倒壊はなかった。

Q：防災グループのリーダーとして活動しているが、消防団とのつながりは希薄。今後つながっていくためにはどうすればよいか？

A：私自身は青年部の会長もしており、自然と地域の防災部会にも顔を出している。米崎分団では、他にも消防団員として同じように顔役をしている者が複数おり、消防団が地域の役も兼務することで、地域に自然と溶け込んでいる。その中で、あそこの方は足が悪いなど、手助けが必要な人が見えてくる。消防団も見回り活動など行っており、ぜひ一緒に回るといいのではないかと思います。どちらか一方が原因ではなく、消防団も、地域のお祭りや催しに参加していく意識や姿勢をもたなければならぬと思う。消防団はよく会合を開いている。そこにぜひ参加してみてもどうかと思う。

Q：消防団1年目であり、市役所職員でもある。いざ災害にあった際に市役所職員に求めたいことはなにか？

A：発災直後の人命を守る手助けは、消防団でも住民でも市役所職員でも関係なく、どんな人でもすることができる。市役所には発災後の活動に力を入れてほしい。支援物資をどうするのか、通信手段をどう確保するのかなど、制限はあるが大きな力を発揮することができ、市役所だからこそできることがある。

Q：ガレキの中でライフジャケットを着るのは、効果的なのか？

A：衣服にガレキが引っ掛かり、前に進めなかったという話も聞いたことがある。ガレキの中では、あまり効果がないかもしれない。ガレキの下を潜れば進めるかもしれない場合でも、ライフジャケットを着ていることにより、潜れないこともある。とても判断は難しい。

Q：津波避難まで30分の時間があつたとのことだが、水門の閉門はできたのか？

A：日頃から、月一回水門の開閉など点検を実施していた。水門のハンドルは、屯所に1つ、水門の近隣住宅に1つ置いていた。団員の4割は浜で生計を立てており、何かあればすぐに動ける団員が多かったこともあり、水門は

無事に閉めることができた。しかし、水門も津波がさった後に見ると、機械でも曲げられないような形に変形しており、津波の強大な威力が覗えた。他の地域では、水門の数に対し動ける団員が少なく、閉めきれなかったと聞いたこともある。また、遠隔操作で開閉ができる水門は、揺れによって形が変わり動かなかったという話も聞いた。

Q：実際に避難物資を持って避難できたのか？

A：持ち出せなかったのか、準備していなかったのかはわからないが、現実には非常持出袋を持ち出した人はあまりいなかった。しかし、免許証など身分証明書を持っていた人は、以降の罹災証明や手続きがスムーズに進んでいた。米崎町は津波被害のため、海岸から離れた地域は無事だった。その地域に行き、お米や毛布を提供してもらえたことにより、食料も確保できた。市内全域が被災した場合、そうはいかない。地域性にあった備えは必要だと感じる。

